

解説・詩人論

「ほどばしる批判精神とたくましい生命力」

佐相憲一

「くにさだきみの詩世界」

石川逸子

「人間を不幸にする世界の構造を透視する人」

鈴木比佐雄

ほどばしる批判精神とたくましい生命力

佐相憲一

ここにお届けするのは、二十世紀半ばから二十一世紀はじめにかけてアジアの日本という国の岡山は総社というまちから、歴史の中の庶民の実態・実感を語り、記録した、類いまれな反骨詩人・くにさだきみ氏の詩業ダイジェスト版である。

読者諸氏の感想はいかがであろうか。少なくとも方々がこれをお読みになって、「圧倒された」のではなからうか。そして、ここに刻印された人々の暮らしや感情や事実、暴露されたからくりなどは、文学的な形で貴重な資料・証言を提供している、ともお感じになったのではなからうか。この分量でこの内容では、いささかへビーで読むのがしんどかった、というのも正直な読後感かもしれない。しかし、それだけ「現代」と呼ばれている時代の内実そのものがへビーなのであ

るから、説得力の前ため息ひとつとして、共感と無念と今後の世界への意欲の入りまじったものを胸に抱かれたかもしれない。

問題作ぞろいであり、重要な労作の数々であるが、そこには痛快で小気味よい、タブーのない本音の言葉が散りばめられていて、読者も所々で思わず「そうだ、よくぞ言ってくれた」と拍手したくなったのではなからうか。あるいは、「そうか、そんな人がいたのか」と知らされたのではなからうか。「これはほっとする」という潤いの詩もあつただろう。

一方では、戦争、資本主義経済社会、天皇制、女性の位置、因習、核問題、貧困、組織と個人、差別。他方では、土地の伝承や風物、花の美しさ。

徹しく激しいくにさだきみ氏の詩の根底にあるのは、人間と人間の心の共有の願いである。黙っていられないのは、理想的な幸福関係から外された存在を見て見ぬふりできない、率先的変革意欲の人間愛である。

残念ながらこの世界はそのような疎外者が多数を占める構造になってしまっているので、くにさだきみ氏は、疎外者が主権者として連帯し立ち上がる思想を胸に、書いて書いて書きまくり、呼びかけ続けるのである。だが、その本質はあくまでも、愛だ。ともすると、作品は憎しみと怒りに満ちた様相を呈するが、よく読めばわかるように、それは憎しみのための憎しみや怒りのための怒りではないのである。

日本やアメリカの侵略戦争の連関の中でゴミのように焼かれ、恋も知らずに殺されていった若い命たち。本来仕事ができてまじめな模範労働者なのに、正当な権利主張をしているために差別迫害される人生とその周囲の人生。その他、作品群に刻印された事例は、いずれも歴史的な代弁者を求めている。個々の命ははかなく、無念でいっぱいであり、悲しすぎる状況だ。しかし、人類のゆく道において、そうした声をしっかりと未来に伝え、今に活かすことができるかどうかで、私たちホモサピエンスの様相もかなり変わってくるだ

ろう。何よりも、そのように消されていった者たちのことを書かずにはいられない、伝えずにはいられない、という強い使命感が詩人くにさだきみ氏を突き動かしてきたのだと思う。その切実性に、私は胸をうたれるのである。

そうした視点が作者自らの言葉で表明されている作品を引用しよう。

歴史の本は

フシギ。

覚え切れない年号と

半島や谷や島や

海の名でよぶ戦いくさのナマエ。

地球という名の惑星に棲んで

歴史の本をひらくと、

(水のようなものや虫のようなものが)

見えないほどのシミをにじませている。

イノチの棲んでいる

たったひとつの遊星なのに

(地球という球体の)

史実のなかには

花の名が

ない。

殺したものと殺されたもの

覚えきれない数の

ニンゲンの死が

(名詞になって

数詞となって)

概数だけの

アラビア数字に変えられて

しらく

透けそうにうすい紙の

繊維のなかに

埋められている。

イキモノのイキル姿をヒトは書かない。

フ・シ・ギ。

宇宙で

たったひとつの

確認できたイキモノの天体。

(地球という蒼い惑星の)

過去の

どこをひらいても

花の名は

ナイ。

〔「歴史のフシギ」全篇〕

これは近年の作品だが、ここにはこの詩人の詩の原点があるように思う。

歴史という大きなものに翻弄され、またそれを動か

してもきた、民衆。そのひとりひとりの存在は消されがちで、本などで学ぶ歴史なるもの多くのページは、ごく一握りの為政者の権力争いと、死者や住民などの数字化された大多数の下層の人々、というスタイルで記述されている。

しかし、たとえば一九四五年夏の広島には、ひとつひとつの顔と個性をもった命と生活があった。一九四〇年の中国の人々にも、一九七二年のベトナムの人々にも、一九九〇年の日本の薬害被害者にも、二〇〇三年イランのアフガニスタン難民にも、中世ヨーロッパの城に幽閉された人にも、ひとつひとつの人生があったし、あるのである。そして、くにさだきみ氏自身にも唯一の存在感と生きる権利があるのである。咲く花のひとつひとつの美しさをとらえたい。生きる人ひとりひとりの姿を描きたい。時代政治状況の本質を暴きたい。何よりそれは、大多数の普通の人々の命が歴史の中でどう特殊化し、状況の何を叫んでいるのか、時代の声と呼ばれる命の声のひとつひとつはど

う悩み、どう泣き、どう怒り、どう願っているのか。刻印することでどうつながっていくのか。政治のからくりはどう人々を欺いてきたのか、詩人は問いかげながら、さまざまな人の生きさまを詩にし、自らの詩想を詩にし、状況を詩にする。

先ほど引用した詩の表現で言うなら、まさに、ヘイキモノのイキル姿を」とらえたい。その強い体感的な認識が、この詩人の執筆エネルギーを支えているのだと思う。

どんな人々のどんな姿が立ち現われているか、作者のどんな詩想がどう状況と対峙しているか、この詩選集の各ページを読んでいただきたいものである。

悲惨な状況の中の個人の声と類の声。だが、これほどまでに誠実に時代と向き合い、歴史と向き合ってきた詩人は、近年、愛する長男の死という一大事に遭遇してしまふ。息子さんもまた誠実に生き、人々とともに生きた命であった。今の世の中、というのは二十一

世紀初頭の日本社会のことだが、弱肉強食の経済社会システムが心ある優しい若者や壮年労働者をスタスタに傷つけている。詩人の息子さんも感じやすいまじめな人ゆえに、いわばおしつぶされてしまったと言えよう。母はなんと無念であったろう。息子さんを記した作品を読みながら、母としての詩人の深い悲しみを思う時、私はただ黙とうするしかない。そして、じわじわと人を自死に追い詰めるシステムへの怒りがこみあげてくる。

政治というものを詩の世界で書けるといえるのは、古来大物のしるしであった。ユゴーもブレヒトも金芝河もそうだった。くにさだきみ氏はその列伝に入る詩人であろう。

レットルに満ちた世界全体にタブーなく切り込んできた詩人。表現されているのは、世界の現実と、想像力による詩的展開である。ユーモアもある。

古今東西の世界詩歌遺産の中に、くにさだきみ氏の

詩業を入れよう。もつと限定して、第二次世界大戦後の戦後詩名詩一〇〇篇を選べと言われたなら、私ほくにさだきみ氏のすぐれた諸作品からどれを代表作として入れるか迷うほどである。それくらいインパクトのある独自の詩の仕事であり、後世に残すべきものでもある。

もちろん、詩人がみんな全員くにさだきみ氏のような作風だったら、辟易してしまうかもしれない。くにさだきみ氏はくにさだきみ氏だからこそのいいのである。

詩のあり方は詩人によって多様である。表現手法上の方法論やテーマの選び方や語りのハードとソフト、ドライとウェット、など、現代詩においては特に、自由な発想と独自性こそが宝であり、それは戦争にもつながった全体主義的なものへの精神抵抗という点で原点ともいえるものであるはずだ。人によって、政治思想と表現形式の選択や詩の好みは必ずしも一致しないものである。それが本当の民主主義というものだろう。

だから、詩に関して何タイズムでなければダメだとか強硬に言い張るのは詩の未来にとって危険なことである。少なくとも私はそういう排他的な論陣の中にはいたくないと考える者である。

そのことを大前提としながら、私はこの超絶的なパワーを感じさせる女性詩人くにさだきみ氏の詩業を重要かつ独自のものと尊敬の念を抱くのである。

今回のこのコールサック詩選集は、くにさだきみ氏の詩業ダイジェスト版としては、一九九八年刊行の土曜美術社出版販売『日本現代詩文庫・第二期』くにさだきみ詩集』以来、二冊目のものである。土曜美術社の詩選集もとてもいい本だった。私自身、そこで初めて第三詩集『けだもの考証録』の作品群などを読み、強烈な共感を覚えたものである。

前回のものがその第三詩集から第九詩集『写撃者』までの選集だったのに対して、今回の特徴は、その後も活躍してきた詩人の作品が第十五詩集『国家の成分』まで収録されていることと、前回は読むことのできな

くにさだきみの詩世界

石川逸子

詩文庫に収録された第一詩集から第十五詩集までの詩群を読み、くにさだきみさん(以下敬称略)は、どんな困難があっても決して目を閉じることなく、まっすぐに今日まで一筋の道を歩いてこられたのだ、とあらためて思った。

鳥肌の女よ そそけだつその胸をあばけ

死のしみついた砂がきざむ

塩っぱい胸の鼓動をあばけ

刻々くずれる砂の上の

軍靴のきざむ 重い死の足どりをあばけ

——「砂上の幻影」部分

第一詩集、冒頭の詩は、その一筋の道をすではっきりと示している。すぐれた手法で。

かった二十代の頃の作品が第一詩集、第二詩集と収録されていることである。壺井繁治賞を受賞した第六詩集『ミッドウエーのラブホテル』や、富田碎花賞を受賞した第十一詩集『壁の日録』などの作品もきちんと収録されている。

初期二詩集の頃の、ドロドロした情念が錯綜しながら存在を必死に問ひかけ、戦争や社会の理不尽をもとらえた作品を今回初めて読んで、とても新鮮であった。後期の事実提示重視のルポルタージュ・タツチの作品群と手法上は異なるものの、作品世界の根底にある作者独自の直観は共通のものがあり、若い頃の詩人の姿が浮かび上がってきて、よかった。

今回、解説は石川逸子氏と鈴木比佐雄氏と私、という世代の違う三名である。それぞれの角度からの多様な「くにさだきみ論」が提供できたのではないかと思う。この本が現代と未来の読者諸氏の心に届くといい。

あらためて、今、くにさだきみ氏に注目である。

第一詩集が発刊された一九五五年といえば、砂川基地拡張反対闘争をはじめ、全国で米軍基地反対闘争が燃えさかった年であり、かたや日本商工会議所が保守合同をうながすなかで、自由民主党が結成されている。防衛庁が、米国のロッキード社・ノースアメリカン社の戦闘機生産技術導入を認可、三菱重工・川崎航空機にジェット機発注を内示したのも、この年だ。

多感な少女期に敗戦を迎え、「聖戦」がアジア・太平洋地域への侵略戦争であったことを知ったくにさだきみは、この年、二十三歳。繊細な心は、おびたしい死体の山を物ともせず、再び響きだした軍靴の音に、全身総毛だちつつ、ようやく訪れた平和を押しつぶさうとするへ黒い椅子にみちる陰のにおいへに立ち向かっていったのだろう。

女ヘンというものは、／家にしたがい、子によりそい、／やたらと音やら意味やらに結びついて、／安っぽく平凡に、存在します。

詩「ナブル」で、数多い漢字の女偏に對し、男偏はほとんど無く、^{なま}男のみであることを挙げ、男尊女卑の愚かさをユーモラスに指摘した、くにさだは、〈女らしくなれ〉と指弾する世間の寒風に身をさらしながら、〈どういわれようが、わたしは女、／男ではなく、わたしは／女。〉であると言ひ、〈男ばかりがいる田舎町の議會で、一人ひとりの教師や母たちでは抱えきれない子どもたちの問題の改善のために、〈50ccのバイクでブルブルクルクル〉すつとび、家に帰れば〈あかぎれだらけの、しみる手で葱をきざみ〉味噌汁を作り、おシメを洗う。

ここには、青鞥の女性たちとは一味ちがった生活の匂いがする「新しい女」がいる。その目は、〈椅子だけがものを言う〉この国を見つめ、ものを言えない腰掛けでしかないOLを見つめる。

その目は、そのまま、広くひろがっていつて、米軍基地・岩国を見つめ、履く主のいなくなった広島への日

和下駄、食べる主のいなくなった〈黒焦げの弁当箱〉を見つめる。

それでいて、彼女の目は、決して感傷的にはならず、常に理知的であり、また、微細に物事をしっかりと見る。

詩「ムラサキツユクサのこと」を読むと、少女のころからそうであったことがよくわかる。

東海村では、ピンク色のムラサキツユクサが咲いている。放射能によって生ずる細胞の突然変異のため、雄しべの毛の色が青からピンクに変わるからだ、と記されたパンフレットを読んだ一瞬、生物の時間、ムラサキツユクサの雄しべの濃紫色の毛を一糸、プレパラートに載せ、顕微鏡でのぞきつづけた光景がよみがえるのだから。

それは

ひとの陰毛をおもわせる

ふかいふかい紫だった。

紫なのに紫なのに

—— みてみて股がさいたヨ！

—— みてみて毛が生えてきたヨ！

—— みてみて癩ができてきたヨ！

—— 光ってるヨ！ みてみてみて！

顕微鏡のなかのゆれる嬌声。

500ミリレム

被曝した雄しべの

ピンク色をした母核と嬢核。

—— 「ムラサキツユクサのこと」部分

詩「ウミポタル」では、上唇の一部から分泌する発光物質が海水にふれて青色に発色するウミポタルも、単に、ふしぎな美しさだという叙情に留まらず、かつて陸軍が照明弾にならないかと研究を重ねていたこと、その後の研究で〈地球という天体に四億年も生き続けた甲殻類の／消化酵素に由来する〉とわかったことま

で追求し、〈制海権も制空権もないのに／消化酵素で光るウミポタルを潰して／いまでは／原子力空母の入港さえも許している〉と終る。

また、先述した「ナブル」にみられるように、言葉にこだわりの、そこから主題を展開させていくのも、くにさだきみの特徴だ。第十詩集『罪の翻訳』では、辞典に載っていない、Goneという米兵たちのスラングにこだわるなかで、広島原爆やベトナムへの枯葉剤の惨をあぶり出し、相生橋めがけて原爆を投下した米兵が、^{release}とそのとき叫んだことにこだわるなかで、カメラの手ブレを防ぐため、シャッターに取りつけるワイヤーも release ということに思い至り、死んだ赤ん坊を抱いて半狂乱で走る母親を写した写真が、手ブレしていることの意味に思い至る。

release しても

release しても

被爆者のもつカメラからは

〈目をあけてちょうだい〉

〈目をあけてちょうだい〉

半狂乱の被写体が

激しい手ブレをおこしてくる。

——「release」部分

米軍の空爆がつづくアフガニスタンで増えつつける無辜の死者たちのなかで、シタラという乳児に焦点をしばり、一篇の名詩「シタラ」が誕生したのも、「星の名をもつ乳児、逝く。」という記事が彼女の心を捉えたからだった。

アフガニスタン・カブールに住む両親は、わが子だけでも空襲から避けさせたくて、親戚にあずけ、生後六ヶ月のシタラ、星という名の乳児をパキスタンに避難させたものの、越境して五日後に栄養失調で亡くなったという。

今日という日が生まれてこない。

いのではないだろうか。

彼女の詩によって、森近運平が、農業試験所を首席で卒業、岡山県庁農務係助手として産業組合の指導をし、成果をあげた男であり、巢鴨の平民社で孝徳秋水と同居、社会主義を唱えたものの、郷里にもどり、郷里のひとびととともに温室園芸を営む地道な暮らしをしていたと知る。

そのような真摯な男が、宮下太吉との、ちょっとした茶飲み話で「天皇紀元の非歴史性」という、いわば当たり前のことを語っただけで、処刑されてしまった。冬、吹雪のなかを、くにさだきみは、森近の生家の潰れかけた納屋を訪ね、這うようにして中にもぐりこみ、外の冬景色をながめる。終章が秀逸だ。

台秤が一台

この国の

冬というものを丸ごとのせて

明日という日も 生まれては こない。

硝煙に染む星条旗の星だらけの 昼 の

空爆だらけの 日干し煉瓦の 砕かれた家。

食べものがない 薬も水もない 村 ——

シタラの祖国。

娘は宇宙の

どの星に移住できたのだろう。

——「シタラ」部分

くにさだきみの詩を読みすすむなかで、このシタラのように、彼女が詩にしなかったら、きつとこの問題、この人物は人知れず、埋もれてしまったままであったろう、という感慨にとらわれる。

「冬の秤」で取り上げられた、大逆事件に連座、処刑された、森近運平などもそうだ。著名な孝徳秋水、大石誠之助などに比べると、岡山生まれのこの人物については、恐らく専門書でもなければ殆ど書かれていな

ありつたけの分銅をぶら下げている

常に外に広がっていた詩人の目は、第十三詩集『静かな朝』で、突然、悲痛な呻きを上げる。逆縁の悲しみ、テツヤさんの死。キツチンの天袋から大鍋を取り出すとき、使われていた踏み台、返されてきたギター、慰めの言葉を知らないまま、でも、耐え難い悲傷、テツヤさんを追いつめたものの正体をも、詩にあらわし得たこと、それは何よりも彼女にとって慰藉になり、テツヤさんへの鎮魂にもなったのではないだろうか。同じ悲傷をかかえるひとにも。

そして、かけがえないひとを失った試練に耐えて、くにさだきみの詩は、内向きに閉ざされることなく、広がったまま、深みを増していつているかに見える。

詩、「炭を焼く」で、次の一行が、読むものの心を捉える。

コトバもたぶん、あれは焼きあげられた炭なのだ。

詩、「暗号」も、味わい深い。

「市民会館の隅っこの席で、ハープの演奏を聞いておりました。聞きながらずっと、わたしは〈暗号〉について考えておりました。」と、静かな出だしで始まる詩は、紀元前三千年前にオリエント文明の中で生まれたハープの由来が、強靱な弦を一本だけ備えた狩猟と戦のための弓であったことを告げ、奏者が、胎児の心音をバツクに流しながら、ヴェルレーヌの〈秋の歌〉をハープで演奏するというふうにはゆっくり展開していく。

しかし、隅っこの〈非常口〉に近い座席にいたことで、〈わたし〉は〈ソクソクする寒さ〉を感じ、その寒さのわけを調べようとして、〈書庫の奥深く眠る、禁帯出の書物〉に突き当たり、〈秋の歌〉を朗読することが、ノルマンディ上陸作戦の指令を意味する〈暗号〉だったことを知る。〈胎児の心音に呼応して、こころよく揺藍がゆれて〉いるような演奏を聴きながら、〈非常口〉からの、〈キナ臭い空気〉を感じずにはいられない〈わたし〉

所詮、戦場というもの、一木一草、殺すか殺されるかに作用して働き、武器ならざるものとしてはございませぬ。

〈暗号〉と申しますものも、平素優しければやさしいほど、鋭く凶器と化するものでございませぬ。

〈秋の歌〉は、まことにそういう、哀しい詩なのでございませぬ。

平穩のなかに含む危機を鋭く感じとり、言葉にして告げるのが詩人の役目だとすれば、くにさだきみは、まさしくそのような詩人であるのだろう。

の系譜に繋がってくと私は考えていた。

くにさだきみさんの第一詩集『蒼の楯』は、一九五五年に小林美和子さんと共著の詩集だった。小林さんが『断章の絵』で十篇、くにさださんは本名の中田喜美の名で書かれた『女人埋没』の十篇を合わせた詩集だった。くにさださんの詩集の冒頭の詩に次の「砂上の幻影」がある。

砂上の幻影

1

白い胸に白い空がある

白い胸に白い風がすぎる

鳥肌の女の そそけだつ胸をあはけ

そこに

たとえば噛まれた一握りの砂がありはしないか

枯れた あばらに

邦國を祭るに花の世界の構造を透視する人

露訳さねでも 澤渡兼定 國家の成分 栗解説文・再収録

サラムへへ。

鈴木比佐雄

(シラミちゃんだつて「北のサラム」だ。

1 大人の棄てた

岡山の詩人がの睡をほきさんの詩には、誰も言っていない世界の構造の香みを昏親木まほし息をま激しいエネルギーを感じる。戦後間もない頃から比較的に温和で芸術的哀詩を著す岡山の詩人たち、例えば永瀬清子、坂本明、冨家ちゆの中に徳んどもくにさださんは全く異質な詩人であつたり全廻廊を置きもくにさださんの大きな大きい詩を書き詩人は、鳴瀬英吉、浜田知章、大崎二郎などの中アリズムの社会性や他者性の強い個性的な詩人たちの中で考える老収まりがせいぞろやあれる。「くにさだきみさんは、徹底した孤立を恐れない単独者であり、世界の苦悩を感じて言動は、狂ゆゆゆゆと真実を丸剥いて株武会勇気ある詩人なのだ。その意味では浜田知章のような、その時代の真実を絶えず詩の中で語ろうとした詩人たち

死のしみついた砂の音が
塩っぱい鼓動をききみはしないか

火の粉のさかんに降る日があった
灰のしきりに舞う日があった

火傷した鉄骨が 小さく空を切つて落とす日
空は にくかに喪にふくし
落剥する鳥が ピンでさされた喪章となった

穂すすきの街に風はかれる
爆風に洗われた建物の そそりたつ影が砂にささる

風は枯れる
影がそりたつ
地に砂は死にたえる

爆心地の一角

すべての 木は土にかえつた
すべての 人は砂にかえつた
はかりしれない 時の風化がそこにあった

2

鳥肌の女よ そそけだつ胸をあばけ
刻々くずれる砂の下から

戦車が噛み合わせる 錆びた歯車のきしみを聞け
炸裂した葉莢に しみついた火薬の刺戟臭を嗅げ

爆心地の がらんどうの建物の陰で

雷管は再び火薬を抱きはじめる

爆心地の ざらざらした砂をかんで

戦車は再び動きはじめる

爆心地の つめたい砂の上に

錆びたことごとくの鉄が鍍う

今 砂をふるいおとした砂時計は一斉に逆立ち
砂にうもれた 一切の死がよみがえる

歴史は再び繰り返すと言う

砂のしきりに降る日があった
灰のしきりに降る日があった
火の粉のさかんに舞う日があった

鳥肌の女よ そそけだつその胸をあばけ
死のしみついた砂がききむ
塩っぱい胸の鼓動をあばけ
刻々くずれる砂の上の
軍靴のききむ 重い死の足どりをあばけ

この詩集が出た一九五五年は原爆投下から十年が経ち、一九五一年に峠三吉の『原爆詩集』が刊行され、一九五二年には浜田知章や長谷川龍生たちが「山河」で原爆詩特集をして、原爆詩運動が開始されてまもない頃だった。くにさださんは隣接する広島原爆を二十歳代前半から自分の大きなテーマであると自覚していたのだ

ろう。その意味でくにさださんは、浜田知章とかなり共通点を持った本格的なリアリズムの詩人として出発したのだ。「鳥肌の女よ そそけだつその胸をあばけ」という一行は、くにさださんのその後の詩作の原点を示している。このわが身を切り裂くようにして歴史的な悲劇と対峙しようとする激しいエネルギーを私はこの一行から感じるのだ。

朝鮮戦争で原爆が使用されるかもしれないという危機意識から峠三吉は『原爆詩集』をまとめたし、原民喜の自殺は再びアメリカが原爆を使用することへの抗議でもあったと広島の人々は考えていたと言われる。後に浜田知章が提唱した被爆してはいけない詩人こそが原爆詩を書き世界に発信しなければならぬという「ヒロシマの哲学」に、くにさださんもきつと呼応するように詩作したのではないか。かりに原爆投下後の広島を忘れたら、人類はもっと悲劇的な戦争を再び始めるのではないかという危機意識がこの詩を生み出したのだ。広島・長崎を最後にしなければならぬという「ヒロシマの哲学」を自らの

内面に深く沈めて、二十歳代前半のくにさださんは故郷の中で独りで詩作の歩みを始めたのだろう。

2

二十歳代の後半の一九六一年に刊行された第二詩集『庄』の十四篇の詩の中に「天国喪失」がある。この詩を読むと、くにさださんがあらゆる幻想を排除しようとする激しさや強さが詩に結実しているのが読み取れる。天上の宗教に決して向かわないリアリストであり、永遠に地上に生きるものたちに関わろうとする態度が強い意志力を生み出している。

天国喪失

あなたは仏教徒ではないのだから、
仏のひざに抱かれたりはしないだろう。
まして、キリストなどではないのだから、
死に臨んで十字架を背負うたりもしなかった。

どんな説話も信じないあなたは、
黄泉の国へも、
たびだたない。

ものいうものは石になるならわし、
それは、ポーランドの民話ではないから、
死んだあなたは、石にされる。
石に変わった石の貌は、
スフィンクスになつて問いつづける。
どうすればよいのか。
どうすればよいのだろう。

醜い異形のマスクを担うて、
娘のわたしが国々をさまよう。
なの花がいちめん、
なの花がいっぱい。
あなたは何もたべないから、
蚕豆の煮えるにおいなど、なつかしくもなんともない

だろう。
あなたは何も見えないから、
甘いめしべの手ざわりなど、くすぐったくもないでし
う。

わたしばかりがばかにひもじく、あてどない旅の乞食
でした。
おなさけ深いみほとけさま。
死んだおやじと生きているのろまな娘は、どこを歩め
ばよいのでしょうか。

(略)

渴いた沙漠のどの旅人より、
オアシスの妄想を忘れよう。
どんな神にも祈らないから、私の口はかたい口ばし。
私は鳥のひもじさのなかの石に変わった石の貌から、
ざくろ石の瞳をつもう。
死者の顔からかおをめくり、死者の胸からむねをはず
そう。

たとえ耳まで口がさけても、石という石を喰いつくそう。
おお、
どんな妄想も捨てた沙漠のどまん中で、
般若のように死体を喰って、おびたしい数の卵を生
もつ。
やがて私にも最期がきて、おろおろと死を迎えるとき、
わたしのとおのく意識のなかを、
どこからともなく数万の虫が集まり、
なまあたたかい血を吸うだろう。

この詩には、くにさださんが情感を一切排除して、石
になった死者たちを喰らいながら生きて子孫を残そうと
する人間の修羅を書き記している。神も仏も信じないく
にさださんが、実はくにさださんのような無宗教の日
本人はたくさんいるはずだ。しかし死が近づくと神や仏
にすがろうとする弱さをくにさださんは許せないのだ
ろう。人間はそのような生半可な宗教心では決して救わ

れないのだと語っている。人間のおぞましさをこのように描くことよって、人間の原罪に近いところを見詰め、本来的な赤裸々な人間存在に近づこうとしていたのではないか。その意味でくにさださんは真の信仰者に近いところにあった。このような試みは決して理解が簡単にされなかつただろう。くにさださんは単独者として自己の内面の問題として宗教心と唯物論の双方を誠実に考えていたことが分かる。そしてくにさださんは唯物論的な考えを選んだのだろう。それはどちらがいいかという問題ではなく、そのように選択して生き続けているというだけだ。その意味でこの詩は、くにさださんの内面の格闘の姿が刻印されている重要な作品だと私には思われる。

3

くにさださんは一九五二年に岡山大学教育学部二年課程を卒業し中学校教師になる。一九七〇年ごろまで教師生活は続いたが、年譜によるとこの年にくにさださんは総社市市議会議員に選出された。教師時代に障害児教育

を担当していたので、きっと行政の壁を感じて、その限界を超えるためには市議会員になるという選択肢があつたのだろう。四期十六年をその後の議員活動で務めたという。浜田知章さんの自説として、何度も聞かされたが、政治家には女性の方が適しているという考えがあつた。男は権力を握ると支配的になり悪いことをするのが常だが、女は生活者の目線がありそんなに悪いことはないと言っていたことを思い出した。そんな女性政治家としてくにさださんは先駆者だったのだ。一九八〇年刊行された第三詩集『けだもの考証録』の次の詩などを読むとそのように思われてくる。

わたしは女

1

性格をなおせという。
女らしくなれ、という。

どういわれようが、わたしは女、
男ではなく、わたしは、
女。
子どもを生むことと、育てることに、
生涯の大半をついやしてきた、
わたしは女だ。

味噌汁をつくって、オシメを洗って、
時間ギリギリ、子どもを預け、
自転車を乗りすて、走りかけの汽車に跳び乗り、
ベルの鳴る教室へかけこむ。

学校と家との往復を、
すつとんでいき、すつとんで帰り、
あかぎれの手に、
チヨーク・教科書と、
鍋釜・包丁とをせわしなく持ちかえては、
ひびきまのこびきま、びびんのこびきま、
職場のことと、家族のことと、

亭主の叱言と、校長のそれとを、
半分半分ききながら、
いちずに情念をこどもに燃やし、
ともかくも、生きてきた、
わたしは、
女。

2

性格をなおせという。
女らしくなれ、という。
そういうことで議員がつかまるかという。

いま、
わたしは教師をやめている。
生んだ子どもも、育ててきた子どもたちも、
そろそろ大人になろうとしている。

性格をなおす——とはどういうことか。

女らしく——とはどういうことか。
しかつめらしい議員の仕事が、
わたしでつとまるのか、つとまらぬのか。

男ばかりがいる田舎町の議会で、
非行の実態や、進学について、
学童保育とか障害児保育のこと、
教室・廊下の雨漏りのようす、
抱えきれないこどもの実情をぶちまけ、
時間いっぱいギリギリのところまで、
市長や教育長、民生部長らを追及する。

教員のころより、いつそう痩せ、
髪を短かく切り、真つ黒けの顔で、
ピラを渡したり、署名をもらったり、
母さんたちと、先生たちと、
こどものことで話をする。
役所と、地域と、家族のあいだを、

ためには、スーパーウーマンにならなければならぬ。
この詩に出てくるくにさださんはまさにスーパーウーマンであり、それを支えたのは家族の協力であり、多くの人の支援であり、またくにさださんのそれを詩に書いてしまうパワフルな表現力であり詩的精神であつただろう。くにさださんは教師であり、妻であり、母であり、政治家でありながら、それらを全て抱えながら本質的には時代の中で苦悩する人びとを直視する詩人であり続けている。

4

第四詩集『指話』には、くにさださんの代表作の長編詩であり二〇〇八年八月に藤沢の市民たちが朗読会「波の音」で暗唱した「アカイ背をもつ被爆の記録」が収録されている。この詩は、詩をあまり読まない市民たちにも感動を与える作品なのだ。この五篇の連作から冒頭の「まっすぐな目」を引用してみる。

まっすぐな目

50ccのバイクで ブルブル クルクル、
すつとんでいき、すつとんで帰り、
あかぎれだらけの、しみる手で葱をきざみ、
——味噌汁をつくる。

女らしくわたしはならない。
わたしは女だ。

一九八〇年に刊行された第三詩集『けだもの考証録』の二十篇の中で最もくにさださんが自己の日常や生き方を語っている作品がこの「わたしは女」だ。今読んでも働く女性を勇気づける作品だ。男勝りの能力のある女性には実はたくさんいる。人間の半分は女性なのだから、男に伍して様々な能力を持つている女性は山ほどいることは当たり前だ。しかし日本の社会では、ほんの少し前までは女は女らしく家にいるべきだという社会通念が存在した。職場でも女はサブ的な仕事でしゃばらないのが美德とされた。しかしそのような通念を壊して活躍する

この子は だれですか
ひとりのこどもが 見ておられます
このひとはだれですか
だれの 子ども衆ですか
——アカイ背をもつ 被爆の記録——
その表紙からも 裏表紙からも
ひとりのこどもが 見ておられます

こどもは
防空頭巾を きておられます
(日本が とつくに脱いで捨てた)
防空頭巾を きておられます

防空頭巾の下からは
すこし 繻帯が 見えておられます
モンペの名まえは よみとれませんが
モンペのボタンが 欠けておられます

——アカイ背をもつ 被爆の記録——

ゴメンナサイ

見られているのが 苦しくなります

(あまりにも これは ひどい いたすら)

ピカの閃光を焦げつかせて

わたしの息子に 瓜ふたつの

この子

この子は いったい だれの子ども衆

不思議なほどに まっしろい

しろい にぎりめしを 手にもつ この子

表紙からも 裏表紙からも

表紙をめくった ページからも

ははおやを 見つめてくる

にんげんを 見つめてくる

ピカを見た こどもの

まつすくな

目

くにさださんは長崎原爆の防空頭巾をかぶった少女の写真をみて衝撃を受けた。ピカを受けた少女の眼差しに想像をめぐらそうとする。放心しているような少女の瞳にあるものとは何であったか。少女の体験が同じ日本人として無関係だといえないのであり、二度と世界中どんな場所においてもこのような少女を生み出してしまわなために、どうしたらいいのか。少女の「まつすくな目」から眼を背けてはならないことをこの詩では記している。くにさださんは被爆体験がなくても、このように一枚の写真から想像力を働かせて読むものの心に原爆の悲劇を伝える詩がかける可能性を示したのだ。戦争の悲惨さは、多くの子どもたちの運命をこのように変えていったことを写真の奥に入り込むことよって語りかけてくる。一人の少女の「まつすくな目」を通して原爆を探っていくという姿勢は、原爆詩を書く上で多く示唆されるところ

がある。

5

第五詩集『貌の餌箱』の冒頭の詩「花がうつくしいのは」は、くにさださんの素直な感覚がそのまま記された心に残る詩だ。くにさださんはこのような作品を実は書けるのだが、あえて多くは書かないのだろう。その意味でくにさださんの詩篇の中では例外であるが、このような花に感動する詩的精神をいつも胸に秘めて、人の世の醜さとのバランスをとっているのだろう。

花がうつくしいのは

花が

うつくしいのは

からだじゅうの

愛を

お日さまにむけ

ひらいているから

おしべよ

めしべよ

だれにむけて

なににむけて

こんなにも

美しく

愛をひらくことが

できるだろう

ひとは

ひとは花のように美しく生きられるだろうか、という問いをくにさださんは発している。私はくにさださんがそれは可能だと語っているように思える。しかしそれを可能にするのはひとが花と同じように「からだじゅうの愛」を開かなければならないという。果たしてそんなことが出来るのだろうか。一人ひとりがその可能性に向け

て生きることの大切さを暗示しているように感じられた。他者のためであると同時に自分が精一杯生きることの大切さを花に託して語っているのだ。

6

第六詩集『ミッドウエーのラブホテル』の二十八篇の中の一章十篇は全てが原爆に関係する詩篇だ。その中で詩「まつさかさまのにおい」がしなやかに原爆を後世に伝えようとしている。

まつさかさまのにおい

さぬきうどんはいかがですか。

たらの芽・ふきのとう、いかがです。

土佐のかつお節はどうですか。

小鯛のささ漬は

からし明太子はいりませんか。

山菜餅・山菜おこわを買ってください。

「全国物産模擬店」ほどの店も、
においを売る店ばかりであった。

海のおい 山のおい

ハブ酒とか球磨焼酎。

琉球泡盛のにおいも――

静岡の新茶、和歌山の八朔、

福井の昆布、鳴門のわかめ。

烏賊を焼くにおい、

串を焼くにおい。めざしのおい。

たこ焼きにたい焼、

とうもろこしの焼けたにおい。

香ばしい

ものを焼くにおいの立ちこめる中で、

それとは違う、

まつさかさまの焼けたにおいを
ひとりの少女が売っていた。

「買ってください。」

『木の葉のように焼かれて』を

買ってください。

ひろしまの

木の葉のように焼かれた

八月六日を買ってください。」

ひとごみに押され

倒されそうになりながら 少女は、

とても食べられそうもない

まつさかさまの

ひろしまのにおいを売っている。

広島・長崎の体験をいかに風化させないで後世に伝えるか。この課題は日本人にとっても世界にとっても重要

な課題であることは間違いない。くにさださんは日本人が各地方の物産のにおいからその存在を誇りに思うように、なぜ「ひろしまのにおい」を共有できないのかと問うている。少女が原爆体験記である『木の葉のように焼かれて』をたずさえて原爆ドーム周辺で「まつさかさまの／ひろしまのにおいを売っていた」ことの意味とは、私たちに広島を風化させない方法を提示しているように思われる。新川和江さんは詩「ヒロシマの水」で朝に一杯の水を飲むときに、原民喜の詩の「水ヲ下サイ」を想起し被爆者の思いを甦らせていく。くにさださんは日常の暮らしの中のおいから、「ひろしまのにおい」を想起し被爆者の焼け爛れ、嗅いだことの無い異臭を発しながら消えていった存在を甦らそうとしているのだ。

7

第九詩集『写撃者』の（あとがきにかえて）に書かれてあった詩「においのことば」からも分かる通り、くにさださんは存在者の臭いによって想像力を掻き立てら

れる詩人なのだ。

においのことば

(前半部を略)

女王バチに昇格したハチが

「フェロモン」を出しはじめる。

以前の取除かれた女王バチ同様、

王台づくりを抑える意味と――

卵巣の発達を抑える意味と――

二重の意味の〈においのことば〉を

昇格したら早速に新女王バチは

王台づくりに精だした

働きバチに口移しのませる。

こうして王座は確立するのだ。

ミツバチのこの「女王フェロモン」は

「階級維持フェロモン」とも呼ばれている。

化学構造もすでにわかって

人工的にも合成が可能なのだが、

一般には

なぜかロイヤル・ゼリーと混同されている。

ひとのことばは〈おとのことば〉

単純に

そう思っているものだろうか。

電波が

口移しに流すロイヤルな情報。

(大喪の礼・大嘗祭・即位の礼。秋篠の宮ご成婚)

とびかう戦場情報戦。

(湾岸から日本へは

ペンタゴン検閲すみの無害な情報のみが送られて

くる)

「警戒フェロモン」

「階級維持フェロモン」

茶の間にも

危険ななにかが匂うのであるが、

一般に

〈においのことば〉は知られてはいない。

*

「フェロモン」

心ときめくとき胸さわぐとき

ふと嗅ぎあてる〈においのことば〉

うす目をあけて構成するとき

――ハマグリのことば――

くにさださんは国家権力が単純に法律や行政や原爆などの最強の軍事力で民衆を支配しているとは考えていない。支配者たちの巧妙な支配は、〈においのことば〉などを総動員して民衆の内側からなされることを暴いていく。くにさださんの詩作の大きなテーマは、国家権力がどのようにして巧妙に民衆を支配するのかを知力と感受性を総動員して明るみに出していこうとする試みだ。

〈においのことば〉を発見していくくにさださんは、人間が発する言語領域が実は多様な表現領域と交差することによって存在していることを示している。

第八詩集『オリの春』の長編詩「オリの春」は、〈アカンボウハ マンゾクニ ウマレタ〉と一九四五年七月十七日に米国務大臣スティムソンが連合国首脳のチャールたちに渡したメモにあった核兵器の誕生から始まる。そしてチェルノブイリの悲劇や米国の世界戦略によって翻弄され、ベトナム戦争の兵站基地になっていく沖縄の春を書き残している。

第十詩集『罪の翻訳』の五篇の連作「罪の翻訳」は天皇の戦争責任、原爆を投下した操縦士の言葉、米国の人種差別、エイズウイルスの入った血液製剤を製造したミドリ十字と関東軍七三一部隊の関係などを重層的に織り上げている。私は第三章「火炎樹の下で」の詩「火炎樹の下で」が心に残り、優れた詩篇だと考えている。

火炎樹の下で

——キム・フックさんが語ったこと——

ひろいサイゴン大学のキャンパス

黄色い花をつける火炎樹の下でキム・フックさんが

語ったこと

〈飛行機の爆音 爆撃の音〉

ナパーム弾の焼ける音

人間の悲鳴

そして自分の走る足音〉

一九七二年六月八日

チャンバンで撮られたニック・ウト氏の写真

『爆弾の降った日』

ピュリッツァー賞のその写真には写らない

駆けていく少女の——懸命の足音

ベトナムのカメラマン ニックウト氏が

世界にひろげたのはベトナムの悲鳴——

そのとき少女が

自分の足音を聞きながら

逃げていたとは知らなかった

少女が十二歳だったということも

裸なのは

ナパーム弾で

シャツもズボンも焼かれたからだということも

その名がキム・フックだということも

知らなかった

ずっと後まで知らなかった わたしは——

戦禍のなかを駆けぬけてきたひとの

そのひとだけが知る そのひとの足音

火炎樹を知って 火炎樹の下ではじめて聴く

キム・フックさんの足音の話

はじめて知る

『爆弾の降った日』の足音のこと

くにさださんの視線は一枚の写真を見詰めることで、その写真の登場人物やその背景を動き出させてしまう。そしてその場所の音を聞き、においさえかくことができ、そのように肉薄していくことは、真似の出来ないくにさださんの特徴だろう。焼夷弾による衣服や肌の焼けにおいをかぎながら、キム・フックさんの逃げる足音が聞こえてくる。民家への無差別爆撃の悲劇をこれほどリアルに伝えている詩は数少ないだろう。爆撃・空襲の悲劇を詩はこのように記すことが出来るという良き手本となる詩篇だ。

くにさださんは第十一詩集『壁の日録』、第十二詩集『訴える手』、第十三詩集『静かな朝』、第十四詩集『ブッシュさんのコップ』とその後も私たちが避けてしまいがちな禁忌の場所を問い、詩にできそうもない困難なテーマに挑戦し続けている。その姿勢に私は敬意を抱き、

既成概念を碎かれて多くの刺激を得ている。

8

新詩集の『国家の成分』は最も難しい現実の国家とは何かという問いを発し、その奇怪な存在形態を浮き彫りにさせた詩群だ。その動機となったのは、北朝鮮の「成分」という言葉だった。社会主義国家であるはずの北朝鮮の現状に切り込むと同時に、日本と米国などの国家というものは、その成立基盤が民衆支配の根幹に民衆を分断させ敵対させて操っていくという構造を、くにさださんは透視していくのだ。詩人であり政治家であったくにさださんだったからこのような類を見ない詩篇が成立したのだ。人間が集まり人間を幸福にさせるシステムであった国家が、逆に人間たちを階層化させて序列を作り、互いが非人間的になるように構造化されてしまう。そして互いを敵視し殺し合っていくのはなぜなのか。くにさださんは、社会主義国家であろうが自由主義国家である

うが、国家というものの冷酷な在りようを真摯に直視し続ける。くにさださんは共産党党员であると明記しながら、詩作するときにはもはや党员を難なく超えてしまい、単独者としてのあらゆる国家の歪みを断罪していく。私にはくにさださんの書くようなスケールの大きい詩篇こそが今の時代においてもっと書かれなければならないと痛感する。私たちの感性は、身近なものを通じて一挙に世界も掴んでしまうものだ。たえず問題意識を持ち続けていれば、「成分」という言葉によって国家の謎を解く手がかりを得ることも出来る。そうくにさださんは語っているように思われる。鳴海英吉、木島始、宗左近、浜田知章など国家や世界と対峙した大物詩人が亡くなり、この世に生きる楽しみがそがれる思いがしているが、岡山にはくにさだきみさんがいる。人間を不幸にする世界の構造を独力で透視する人がいることはとても心強い。くにさださんの批評精神は自己と国家を同時に曝け出し、世界を透視しようと試みるのだ。

最後に、詩集題の「国家の成分」を一部引用する。困

難な情況の中でも個人の力を信じて国家や世界を変えていきたいと実践している多くの方に読んでもらいたい。

国家の成分

北朝鮮では

人民が

「成分」に分けられている。

〈核心階層〉

〈動揺階層〉

〈敵対階層〉

成分は

大きく分けてこの三つだという。

朝鮮労働党の党员とか

一九四五年八月以前に労働者・貧農だったもの、

朝鮮戦争で

死亡した兵士の遺族は、

〈核心階層〉

その逆の

〈敵対階層〉は、

地主。

資本家。

キリスト教徒や仏教徒。

〈動揺階層〉というのは

いまは労働者階層なのだけれども、

以前は

中小企業の経営者だったり

土地もちの農民だったりしたという。

そういえば、

わたしの提出した履歴書にも

小さく

『本人階層』という欄があつて、

そこに

「事務労働者」と書くように言われた。

(略)

あのとぎ

日本共産党員のわたしは

国家にとって――

まぎれもなく

〈敵対階層〉であつたはずだが、

党内での「成分」は

たぶん

〈動揺階層〉のひとりであつたらう。

どこの国でも

いつの時代でも

民衆は

「成分」に分けられるのだ。

(「国家の成分」の前半部)